

# フィレンツェ・アシジ・コルトナ



濁流に洗むポンテ・ヴェッキオ、フィレンツェ

郡 定也

昨年十一月中旬、パリ・リヨン駅発の夜行寝台列車にのりこんで、まずミラノに立寄り、ついでパドヴァ、ヴェネツィア、ラヴェンナなどを転々としている間、ほとんど連日といってよいほど降ったり止んだり雨天つづきに少からず閉口させられ、最終目的地フィレンツェにつくと、案の定ホテルのテレビのニュースも中部イタリア一帯に降った豪雨による被害を報じている始末で、氾濫せんばかりのアルノ河の泥まじりの濁流を空々しく映しているのだった。

無情の雨に、気分も重い。

イタリアはやはり真青にひろがる明るい陽光のもとでまわりたい、それが願いであったのに、来る日も来る日も、はじめと暗灰色の雲と降りつぐ雨になやまされるとき、まるで極東の梅雨季とそっくりなので、いつどこでもいい、陽差しのつよいところへすくにも移動したいくらいのものだ。旅の面白味は、ふだんは眠らせたままにしている神経をそっくり甦えらせ、わけでも視線の欲動に自分のすべてをあづけることにある筈だから、できるだけ光量が充溢して効率よく微小の対象までも照らしだ

してくれるのが望ましい。それはとりもなおさず、晴れわたった大空のことだ。

けれども旅へ誘いこむ幾多の情報、こそぞって、透きとおるような蒼空にくつきりと浮きたつ寺院や軒並みや樹木を、まるで至上の観光財であるといわんばかりに強要してやまない。次々と消費される空しいステレオタイプにすぎないとわきまえていても、秘かにそうした氾濫するパターンを自らなぞって、「花の街」フィレンツェへと駆りたてられているのかもしれないのだ。

いまは青空さえも商品記号の一つにすぎないと想いたれば、曇天も豪雨も、これはこれで換えがたい何ものかをみせてくれるにちがいない、そう自分にいいかせるほかはない。

ましてここは、かつて一人のフイエゾーレ生れの画僧（フラ・ジョヴァンニ）がつましく天上への夢をうたい上げた街ではないか、暗雲たれこめた景観ひとつで彼の絵にしめつた空気が入りこむわけでもあるまい。

ようやく想いなおして、フロントへ降り、一週間の滞在を告げることにした。

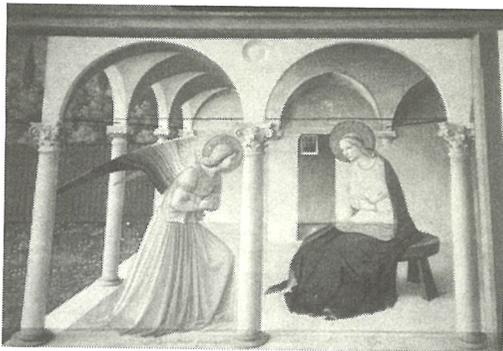
「シイ、シニョール！」、やけに明るすぎるひびきが返ってきた。

フィレンツェの街は名だたる寺院と傑作の宝庫であるから、まずは体力が勝負となる。ところが、これまた連日オリブ油の勝ちすぎた料理をあれこれ試しつづけてきたので、胃袋のほうもそれほどはうけつけなくなり、ざるそばかお茶づけのたぐいがしきりに脳裡を駆けめぐる。もともとパリでの下宿ぐらしも、どちらかといえれば和風優先を心がけて自炊生活を通しており、和洋をほどよく交互に工夫して楽しんでいくのだが、旅にでると不如意があまりない外食にいつも悩まされる。かといって、しかし町中を歩いていて思わぬところで出くわす日本料理店には、一瞬まよいが生じることはあっても、けっして入らない、入りたくないという規制のしかたも課しているもので、ここが性格のいささか窮屈なところである。要は、頑健な胃袋でさえあれば言うことがないわけで、それにはどうすればいいか妙法を心得ないだけのはなしである。かくして体力の乏しさは、なけなしの気力

で補わざるをえない。

さてフィレンツェの美術巡りは気力次第ということにして、ここで、さきに挙げた画僧のことも触れておかねばならない。このひとは、本名をグイド・ダ・ヴィッキオといい、ドミニコ会での僧名をフラ・ジョヴァンニ・ダ・フィエゾレと称したが、十五世紀前半に活躍した画家としてマサッチオなどと並んでよく話題にされる。フラ・アンジェリコとかベアト・アンジェリコという呼称のほうでなじまれており、主要作品がサン・マルコ修道院美術館によくまとまった形で保存されているのは、周知のとおりである。残念なことに、訪ねた時点では一階右手のアンジェリコ作品を集めた旧「宿泊室」は工事中のため閉じられていて、階段上の「受胎告知」とこれにつづく二階僧房の一群の作品のほかは「十字架のキリストと聖ドミニコ」(回廊正面)「磔刑と聖者たち」(参事会室)などが見られるのみであった。ここはしかし、ただ彼の重要な作品があるばかりではない。何よりも、世界各地の美術館に散らばってしまったア

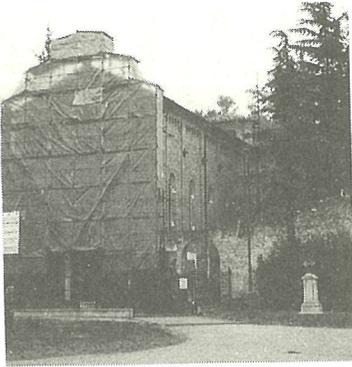
ンジェリコ作品とはちがつて、作者自身が、ミケロツォの設計によつてでき上ったばかりの修道院の各室に(おそらく弟子たちとともに)祈りと瞑想のうちに描きあげた壁画作品がほとんどそのままの形で眼前に立ちあらわれるのだ。画家自身のひそかな息づかいが聞こえてきそうな一室一室は、相互に濃密な空間を織りなし合つて、作品



ベアト・アンジェリコ「受胎告知」、サン・マルコ修道院美術館

というものの真の所在がいかなるものであるかを仄めかしてくれる。ミケロツツォの明快な空間配分に、アンジェリコの簡潔な画風がそっくり融けこみ、深い交感域に達していることが、この比類なき魅惑を語っているのではないだろうか。ここは曾っても今も欲想の聖域だ。

フィレンツェを基点に、シエナやアシジへ足をのばすひとも多い。美術の上ではほかにペルージャ、アレツツォ、オルヴィエートなども立寄ってみたいところであるが、今回はアシジ行をえらんだ。そして帰



スクロヴェニ礼拝堂、パドヴァ

路にコルトナへ。

パドヴァのスクロヴェニ礼拝堂は、以前の在外研究の際には大がかりな修復工事のため入ることが叶わなかったが、今回はじめてみて、その初々しくよみがえった堂内の壁面に、とりわけ堂内全体の基調色ともいえる冴々としたブルーの感触にすっかり呑みこまれてしまったので、ひきつづきジヨットを求めてアシジへゆくことをそこで想い定めていたのである。

しかしコルトナの方は、知る人も少ない。フィレンツェから約一〇〇キロ南下した田舎町。トスカーナとウンブリアの境界あたりにトラジメノというかなり大きい湖があつて、そこから僅か数キロ北に位置しており、海拔六〇〇メートルほどの小高い丘の上に開かれた町である。この司教区美術館にアンジェリコのもう一つ「受胎告知」図がある、これを見たいというのが目的だ。ところが手元には詳しい資料がなにもない。

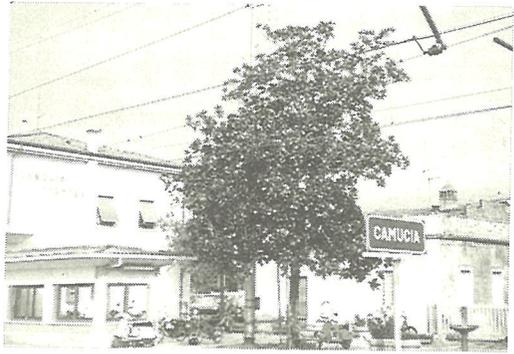
ないままで出発したが、無謀といわれればその通りであるが、細緻な計画などに合わないのだから致しかたない。単身旅



小雨にぬれるサン・フランチェスコ聖堂、アシジ

行がよいのは、他人を巻きぞえにしないで失敗をやり、そして失敗にこりないことである。

何しろ一日の日帰りでアシジとコルトナを訪ねるといふ大雑把なことしか念頭がない。列車の時刻表をみて、アシジはサン・フランチェスコ聖堂のみ、コルトナは美術館のみと限定すれば充分まわれそうに思え



晴れはじめたカムチア・コルトナ駅

た。早朝七時五分発の列車をテロントラ駅でのりかえて、実はこの駅がクセモノであった、アシジには十時ごろにつく約三時間の片道行程である。発車時には降っていた雨も途中から上りはじめ、ようやく着いたアシジの駅にはジョットの絵にでてるのとそっくりの木が植えられていて、そのわざとらしさにはむしろほほえませられるが、周りを見廻すと左手の山の上に遠望できる

街が一つあるばかりで、目ざすのはあれしかないのがわかる。

観光客とおぼしいひとたち数人がバスにのりこむので、これに従う。曲りくねった道を登りコモネ広場の上あたりのバス停で降り、ここからまた降りだした小雨のなかをバジリカ（聖堂）まで歩くのだが、人通りのない細い道が幾重にも曲りくねっているで方向がつかみにくいため、そのつど人を探して尋ねなければならぬ。

ようやく辿りついて驚いたのは暗い大きな堂内に、思いもよらない大勢の見学者たちがざわざわとひしめきあっている光景だ。観光バスでやってきた何組ものグループが、案内役の修道士の説明をかこんで聞き入っているのはまだよいとしても、中高生のような集団はふざけあったり、おしゃべりに熱中したりでとてもじっくりと見学するどころではない。修道士や尼僧の一人も来ており、一々のプレスコについて飽くことなく語りあい、論じあっている。ことばがことばを呼び、仕草が仕草をよび、その騒然たるさまは何か得体のしれない欲動の沸騰を想わずにはおかない。天界への

希求もいまは空ろにひびく。それでも上堂から下堂へ、再び下から上へとジョットと弟子たちの幻影をさぐって一巡しおえた。

窓も乏しく照明も抑えられた下堂の壁面はすこぶるみにくいため、懐中電灯が必需品らしい。上堂はやや明るさをとりもどすが、視線を壁面にそって天井へと向けなければならず、この仰向視が充滿する画像の各々に對抗するにはかなりの生理的苦痛を覚悟しなければならぬ。視線に、遊ぶ余裕を与えないのだ。周りに気を散らされてほとんど感得するものがないまま、そそくさと外へとびだし、やっと深く息をすいこんだ。

時計をみると十二時十二分発のフィレンツェ行列車まで、あまり時間の余裕もない。慌しく周りの景色をカメラに収めるやすすぐさまコモネ広場まで早足でゆぐが、バスでは間に合いそうもなく、ちょうどまっていたタクシーを使って駅へと急ぐ。昼食をとる時間もないまま列車にのりこみ、雨でかすみがちな車窓の風景に眼をやると、やがてトラジメノ湖の傍らに何台ものキャンピングカーがひっそりと雨に打たれていて、人影もない。一体こんな連日の雨降り

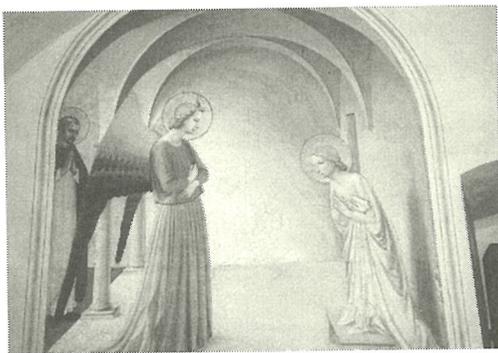
のさなかに何を愉しみにやってくるのか。

コルトナには二つの駅があつて、一つはテロントラ・コルトナ、もう一つがカムチア・コルトナ。しかしどちらで降りるべきか決めかねるので、通りすがりの車掌にきくと、テロントラからバスで行けるらしい。小さな駅に降りてみると、雨もすっきり上つて、駅前にはバスが一台。運転手は、うなづいてドウオモへ行けるという。小学校の下校時らしく、ふざけあう子供たちものりこんできた。ところがかなり走つていくうちに、乗客が次々とほとんど降りてしまつたころ、運転手がここで降りて、少し先の所から別のバスにのりかえろといつてくれる。見廻してみても、バス停らしいものはない。言われた通り、先の方へ歩いていくと、どうも駅舎のような建物の前にできて、これが何とカムチア・コルトナとある。つまりテロントラの次の駅であつて、わざわざバスなど使うことはなかったのだつた。構内にはひとの姿も僅かで一人風体のいかがわしい中年の男がしきりにこちらを観察しながら坐りこんでいる。駅前にもバスが一台とまつているが、運転手も乗客も

みあたらない。タクシーもない。バスの横に小さな売店があつたので、コルトナの聖堂へ行くバスのことを尋ねに入つたら、すぐ出発するのはないから一時間くらい待てと、無愛想な返事だ。再び駅へ戻つて行くか諦めるか考えこんだが、仮に行つても、閉館時間までゆつくりとはできないし、駅へ戻るバスの時刻も定かでないとなると、支障なくイレンツェへ帰りつけるかどうか危うい。バスで昇つて二十分位はかかりそうな丘の上の街だから、とても歩いていくほどの気力はない。遙かの高みに城壁でかこわれたコルトナを所在なく遠望しながら、しばらく呆然とするばかりであつた。

すつかり天気も回復した翌々日、再びフイレンツェからカムチア駅に降りたつて、みつけた職員にきくとバスがないからタクシーで行けという。バスで行けるときいていたので言っている意味がつかめずキョトンとしてみると、傍にいかかわしい、男がゆつくり近寄つてきた。他に尋ねる相手もいないのでタクシーは来るのかときくと、自分が運転すると仕草でいう。みると駅前

にタクシーの表示板もつけていないやつが一台あり、指をさしている。そういえばこの男は先回も、駅でこちらの挙動をうかがつていたのである。乗客探しというよりカモを狙う犯罪者のような眼付で、パリのメトロにはこの手の人間がごまんといて気が許せないのを心得ているから、ふだんなら断わつてしまうとこだが、このときはなぜかカモ探しの男に好意を覚えてしまい、



「受胎告知」(僧房第三室) サン・マルコ修道院美術館

即座に決断した。白タクで登ること十数分で丘の上に達し、レプブリカ広場の一角に降ろされたが、ちょうど土曜の朝市が開かれていますらしく、町中の人間がみなここへ出てきたような感じをうける。雑踏のなかをかきわけてエトルスク博物館に立ちより、ここで始めてコルトナのガイド・パンフをもらい、概略の地図を頭に入れた上でほとんど司教区美術館に到着することができた。さきの広場から離れるにつれて通りはひっそりと静まりかえって、聖堂と美術館の向きあう小広場にもひと一人みかけない。

ここは小規模な美術館で、受付役の婦人が一人いるのみ、見学も当方一人。ルカ・シニョレリ他の約四、五十点の作品が並べられ、なかでも別格扱いとされているのがアンジェリコの「受胎告知」と「聖母子」の二点で、前には、麗々しくロープが張られている。引きよせられるように告知図の前に立つと、ここへ来るまでのごたごたとした行きがいを一切忘れさせられ、ひたすら画面に秘められたことばに想いをこらすばかりであった。

(大学文学部教授)

## 『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成っている。

第一部 創業と成育(明治前半期)  
第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直蔵総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)

同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起させるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリス

ト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になつていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」一、六五八ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価・六〇〇〇円。

「資料編」二、一九二ページ。

頒価・二二〇〇〇円。

発行・学校法人同志社  
取扱い・同志社取益事業課  
( ☎〇七五―二五一―三〇三八 )